

小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」により 子供の内的変容を導く「音楽づくり」(まとめ)

—学習評価の観点からの分析—

新山王 政和* 天野 朝代**

* 音楽教育講座

** 附属岡崎小学校

Elementary School Music-Making Activity Utilizing the “Trial and Error Method with Thinking” (Final): Analysis from the Point of View of Learning Evaluation

Masakazu SHINZANO* and Asayo AMANO**

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

はじめに

本報告は「2017年度カワイサウンド技術音楽振興財団研究助成」を受けて、5年間に亘り小学校教員と共に取り組んできた小学校音楽科「A表現・音楽づくり」に関する実践研究のまとめにあたるものであり、今回は附属岡崎小学校の天野朝代教諭による研究実践を分析対象にしている。⁽¹⁾ 天野教諭の授業は、音楽に合う身体表現を追求する活動であったが、筆者はこれをリズム創作の視点から音楽づくりの活動と独自に捉え直して、主体的に学習に取り組む態度の評価観点と音楽づくりの評価観点を中心に分析した。

研究の分担は、研究実践の企画を天野教諭と筆者が担当、研究授業の計画立案と実施及び一次分析を天野教諭が担当、さらに筆者の視点から二次分析と考察を行っている。なお筆者が独自に、踊りを伴うリズム創作(音楽づくり)という視点で行った分析と考察は4章で紹介している。

I. 筆者の先行研究のまとめ

筆者は2017年度にカワイサウンド技術・音楽振興財団より研究助成「小中学校教員と連携して開発する音楽科授業におけるICT機器を活用したActive Learningのモデルプラン」を受けて以来、偶然性に依拠した音並べではなく思考を伴う試行錯誤による小学校音楽科「音楽づくり」の研究実践を小学校教員と

共に重ねてきた。研究の区切りとしてこれまで5年間の先行研究で確認した結果を整理しておきたい。⁽²⁾

なお本文中、文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)『音楽』」は、「学習指導要領」と略記する。また学習指導要領の〔共通事項〕で示されている「音楽を形づくっている要素」についても、「要素」と略記する。

1. 筆者の先行研究で確認された音楽づくりの課題

先行研究において次の点を確認している。

(1) 要素に関する気付きは多くあったが、そこから醸し出される曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取るものは少なかった。つまり要素に気付き知覚することも、雰囲気や曲想を感じ取る感受と結びつけることは難しかったと思われる。

(2) 要素の気付きの多くは強弱と速度に関するもので、僅かに音色とリズムがあった。しかし旋律、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズに関する気付きは無く、「音楽の仕組み」(反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係)に関するものも無かった。

(3) 音楽づくりの活動に入り試行錯誤や創意工夫に取り組む段階になっても、音楽の仕組みを活用する発想に至らなかった。その理由として、それ以前に行われた「音遊び」や「あそび歌」「わらべ唄」等の活動の中で音楽の仕組みに気付かせたり意識化を促したりする指導が不足していたと考えられる。

(4) 要素と曲想や雰囲気の関係については、「○○が△△したから□□に感じた」や「□□な雰囲気は○○が△△したから」等の適切な声掛けや導きが無いと発想を得にくい。それ以前の表現や鑑賞の活動の中で、要素と曲想や雰囲気との関係に気付かせたり意識させたりする指導が十分ではなかったと考えられる。

(5) 発言のポイントを抽出して小型ホワイトボード等へ板書したり、対峙する意見を分かりやすく関連付けて整理したりする議論の視覚化が、話し合いの方向性や経緯、個々の発言の関係性や議論の全体像を把握することに役立っていた。

2. 音楽づくりの活動の改善に向けた提案

前節の確認事項を受けて次の6点を提案する。

(1) 最初に表したいイメージをしっかりとらせてから音楽づくりの活動に取り組ませる。「思いや意図」に向けた試行錯誤や創意工夫のためには不可欠である。

(2) 音を並べるだけの活動に陥ることなく、音が意味をもつ音楽として子供の中で絶えず鳴り響いているような、音や音楽と結びついた活動を大切にさせる。

(3) 要素と曲想や雰囲気との関わり気付くためには、要素の変化と、その効果や働きについて比較できるように表現と鑑賞をリンクさせた活動を行っておくことが大切である。気付けないことや知らないことを活用して音楽づくりを進めることは、子供には難しい。

(4) ICT機器により、作った旋律の録音再生を聴いてふり返りながら創意工夫すると、表したいイメージに近付くための思考を伴った試行錯誤を深め易くなる。

(5) ICT機器により「探求→必要なスキルや知識の習得→習得したものを使ってみる→使っている間によりよいものをめざして探求が深まる」等の学びのサイクルを活性化させることができる。

(6) 教師の役割は、旋律の出来栄を総括的に評価することではなく、活動のプロセスを形成的に診断しながら活動の成果に価値づけを行い、それを伝えること。

3. 中学校音楽科「創作」へ繋げるための検討課題

前節を協同研究者と共有した上で、さらに高学年で2年度に亘って進めた研究実践から、次のような子供の変容や成長を確認した。今後これを生かして、中学校音楽科「創作」へ繋いでいく方策を検討したい。

(1) 要素と曲想や雰囲気との関係性の感受

次の気付きが見られたことから、要素の変化と曲想や曲の雰囲気との関わりについて理解が深まりつつあると考えられる。

- ①長調と短調の感じ方の違いに関するもの
- ②強弱の感じ方の違いに関するもの
- ③音色の感じ方の違いに関するもの
- ④速度に関するもの
- ⑤あいだに「間（ま）をあける」というもの

⑥音の高さ（音域）の感じ方の違いに関するもの

さらに、理由を説明した上で「○○の場面で生かせよう」という気付きもあったため、要素と曲想や雰囲気との関係性を活用しようとする片鱗が見られた。

(2) 2つ以上の要素がもたらす働きやその効果の感受

明るい雰囲気を出すために「調を変えてみる、速さを変えてみる、楽器を変えてみる、和音を変えてみる」等、調、速度、音色、和音の響きの4つの要素を工夫していた。また曲の雰囲気を変えるために音色と音の高さの2つの要素に注目して、旋律の音域を高くして明るい雰囲気を醸し出そうとしたり、伴奏の響きを明るく感じられるものに工夫したりしていた。

(3) ICレコーダーを活用したモニタリングの効果

ICレコーダー活用することにより、自らの演奏や音楽に関する新しい気付きや意識化がみられた。

①以前の演奏と現在の演奏を聴き比べながら、表したい思いや意図により近づく表現を工夫していた。

②たたき方の演奏法を工夫して、表したい表現に近い音色を出せるように工夫していた。

③「（聴くと）意外に違いがわからない」のように、自分が表したい表現に近づくように再検討していた。

④「間（ま）をとって雰囲気を変える」等、ICレコーダーの録音を聴いたからこそ気付ける発言もあった。

(4) 板書による思考の足跡の把握と学びの履歴の共有
小型ホワイトボードの板書を用いた活動プロセスの視覚化により、自らの気付きや学びを上げるだけでなく、思考の足跡の把握や学びの履歴を共有する助けになっていた。これにより8割以上の子供から「新たな表現の方法を知った」という趣旨の記述を得た。

(5) 表現と鑑賞の一体化により触発された知覚と感受

音楽づくりに入る前に、要素の変化や組み合わせから醸し出される曲想や雰囲気の変化について体感しておく必要がある。表現では、自身の思いや意図を表現するために要素がどのような働きをするのか知り、要素に注目して演奏を工夫することで、曲の雰囲気や曲想の変化を体感できる。鑑賞では、俯瞰的に曲全体を捉えて作曲者の思いを類推したり、音符の配列に込められた意図を解き明かしたりする体験が、経験値として蓄積されていく。これらの活動を重ねることで、創造的に音楽と向き合おうとする素養が育まれる。

II. 小学校音楽科の学習目標の再確認

平成29年告示の「小学校学習指導要領」及び「中学校学習指導要領」が完全実施へ移行した現在、筆者が小中学校の授業研究会で見聞した混乱について今一度確認しておきたい。筆者の一連の研究の立脚点でもあるので、4項目に分けて押さえておく。

1. 小学校音楽科の学びの姿

学習指導要領が示された当時、音楽科教科調査官を務めていた臼井学氏は次のように述べている。⁽³⁾

- (1) 音楽教育ではなく、音楽科教育である。音楽教育は音楽に関する全てを対象とするが、音楽科教育は学習指導要領において定められた教科の学習。だからこそ、その内容を理解しておかなければならない。
- (2) 楽しくなければ音楽じゃない。しかし、楽しいだけでは音楽じゃない。
- (3) できない活動はあっても指導できない事項はない。
- (4) 楽しさを子供たちと一緒に発見する意識をもつ。活動の楽しさだけから、学習の楽しさへ。

2. 音楽科における4つの知識の形

臼井学氏は音楽科における知識を4分類している。

- (1) 「覚えればわかる知識」：用語、作曲者、曲の背景等。本や教師の指導によりわかるようになるもので、子供が自分で考えて自然に理解できるものではない。音楽活動の文脈の中で教えることが大切。
- (2) 「聴き取ることによってわかる知識」：学習指導要領〔共通事項〕の「音楽を形づくっている要素」等。音と結びつけることで理解できる。
- (3) 「感じ取ることによってわかる知識」：要素やその変化から多くの人が感じ取っていること。音楽活動の中で要素の知覚と要素の働きの感受を結び付けることによって理解できるようになる。
- (4) 「学習過程を経てわかる知識」：既習の知識を子供自身が結び付けて組み立てることで、自分なりの捉え方で理解し、更新していくもの。

3. 音楽科における「主体的・対話的で深い学び」

これについて臼井学氏は次のように述べている。

- (1) 主体的な学びとは、学びの見通しをもち、学びを振り返ることで、次の学びに繋げていく学習活動。
- (2) 対話的な学びとは、他者との対話などにより、自分の考えを広げたり深めたりする学習活動。
- (3) 深い学びとは、知識を相互に関連付けてより深く理解し、それを確かめることで新たな問題を見いだしたりその解決策を考えたりして、思いや考えを形にしていく学習活動。(筆者注：音楽科の知識は前節参照)

4. 筆者が重視している音楽科の学び

筆者が大切にしてきた立脚点を6つに整理する。

- (1) 何気なくできている「無自覚的な学び」に気付かせて、試行錯誤による創意工夫を重ねることで自分の意志で使いこなせる「自覚的な学び」へ高めていく。
- (2) 子供の吹きや発言から気付きを見つけ出し、全体に広げて共有共通理解化しながら創意工夫を促す。
- (3) 子供の言葉を板書し、それを書き直したり書き加えたりして思考の足跡を把握できるように視覚化する。

(4) 音楽科における知覚と感受。要素の知覚(気付くこと)と感受(感じ取ること)が活動の基盤になる。「○△が□□になると、□□な感じがする」という要素の知覚と感受の関係性を読み解き、両者の関係を解き明かすことで知覚と感受が有機的に結び付き、音楽活動において試行錯誤や創意工夫する原動力になる。

(5) 新しい知識の捉え。丸暗記や知っているだけ等の表面的な知識から脱却し、自分なりに理解を深めて活用していきける知識を身に付けさせる。

(6) 新しい能力の捉え。やっているだけ、やっているうちにできた等の自らの意志や意識を介在しない技能から脱却し、必要な時に自分の意志で使いこなすことのできる技能を身に付けさせる。

III. 本報告で取り上げる天野教諭による実践

附属岡崎小学校で天野朝代教諭により行われた研究実践の概要を、実践者自身がまとめた「令和2年度2学期実践のまとめ」より抜粋して紹介する。⁽⁴⁾

1. 「第1学年音楽科学習指導案」指導者：天野朝代

(2020年10月～12月実施、1年1組31名在籍)

(1) 単元：「たたいて なかよし おどって あそぼう『ねているらいおん』のせかいで」(17時間完了)

(2) 目標：

① 仲間よさを認めたり、自分のよさが他者に認められたりすることで、自分の表現に自信をもち、新たな表現を生み出そうとすることができる子供にしたい。

② 場面から登場する動物を想像し、拍を感じながら身体表現をしたり、ジャンベをたたいたりして、そのイメージを音楽表現できる子供にしたい。

(3) 実践者が想定した単元実施前と単元後の子供の姿

① 単元実施前の子供の姿：気の合う友達とのなかで、柔軟な想像力や発想力を生かして表現する面白さを感じている。音楽に合わせてみんなで踊る楽しさを感じながら、拍やリズムの大切さに気付きつつある。

② 単元内の子供の姿：仲間とともにリズム打ちをしたり、踊ったりしながら、仲間と表現する面白さを感じる。仲間の考えのよさや足りなさに気付き、自分の考えに取り入れ生かそうとする。

③ 単元後の子供の姿：仲間と互いに認め合うことで、自分の表現に自信をもち、新たな表現を生み出すことができる。自分のもつイメージを表現していくなかで、拍を意識しながら身体表現やリズム打ちができる。

(4) 教材：音楽「ライオンは寝ている」原曲：The Tokens「The Lion Sleeps Tonight」、ジャンベ(打楽器)

(5) 授業の流れの概要(筆者による要約)

実践者が作成した単元構想から筆者が主な活動のポイントを整理して紹介する。詳細については、本文末

に載せた実践者作成の「単元構想図」を参照されたい。授業の中心活動は、トーキングが演奏する『ライオンは寝ている』に合った踊りの表現を考えることで、ジャンベと身体動作によって「ねているライオン」を表そうとしたものである。丸数字は時数である。

①～④「ねている らいおん」で遊んでみよう。

トーキングの『ライオンは寝ている』の演奏に合わせて、自由にジャンベを叩く活動。

教師支援：皆で演奏する楽しさと、それぞれが異なる演奏をする面白さを掘り起こした。また常時活動の中で、音楽を形づくっている要素に応じた身体表現をする面白さを掘り起こした。

⑤「ことばから、音から考えてみよう」

『ライオンは寝ている』の演奏から、寝ているライオンのイメージを膨らませる活動。歌詞の言葉をイメージ化するものと、演奏の音からイメージ化するものの、2つの面から活動を行った。

教師支援：音楽に合わせて身体表現をする中で動物の様子を想像する面白さを掘り起こした。またジャンベを使ったリズム遊びから様々なリズムを打つ面白さも掘り起こした。

⑥～⑨「ねている らいおん」の世界にいる動物を自分の踊りで表現したいな」

『ライオンは寝ている』に合わせて、寝ているライオンの様子を、ジャンベを用いた踊りで表現する活動。音楽の面から考えるものとイメージから考えるものの、2つの面から創意工夫した。

教師支援：抵抗なく活動に取り組めるように日常親しんでいる遊び歌の要素を取り入れた。また繰り返し遊んでいく中で、同じ踊りでも人によって違うという気付きから感想交流を行い、違う面白さを意識させた。

⑩「抽出児童の踊りをじっくり見て思ったこと」

追求意欲を高めるために、動物の動きを具体的に踊りとして表現している児童を紹介して、そのよさを取り上げた。そのために『ライオンは寝ている』の演奏をじっくり聴く時間を設けた。その後抽出児童が考えた踊りを全員で見て、感想や交流やアドバイス交換を行った。終わり方の工夫の部分で意見が活発に出て、試演しながら工夫を深めていた。

⑪～⑬「ぴったり合わせて、イメージに合わせて」

改めて自分自身の踊りについて考え直した。考えた踊りを仲間とともに試してみながら工夫を深めた。

教師支援：仲間の追求のよさや困っていることに目を向け、自分の追求に生かしたりアドバイスしたりできるように朱記や授業中の対話で働きかけた。音楽の終わりと踊りの終わりとを一致させたい児童の例を取り上げて、拍のまとまりの意識をもたせた。

⑭「自分で踊りを考えていく中で大切だと思ったこと」

これまでの活動を振り返って、感じたことや考えたことなどを意見交換したり、感想交流したりした。

教師支援：音楽的な成長を感じ取ることができるように、動画を使って追求前の踊りと追及後の踊りを比較して見せた。

⑮～⑯「自分で考えた踊りを使ってみんなで遊ぼう」

自分の考えた踊りをグループの中で身体表現することで、仲間の踊りのよさを感じとる活動。

教師支援：仲間の追求のよさを生かすなど、仲間とのかかわりの中で生まれた自分のよさを実感させるために、どうやって自分が成長したのかを問い返した。

⑰学びを振り返るかかわりあい

「自分の踊り」「新しいチームで」「友達の踊り」の3つの視点からふり返り、感想交流を行った。

(6) 板書記録

天野教諭が子供の発言を整理しながら記した板書が、子供の思考の流れや学びの足跡を共有共通理解するのに役立っていた。筆者が入手できた一部を紹介する。

①10/9「どうぶつおんがくほくだーれ?」「ライオンはどんなきもちでこうしんしているの?」

ホワイトボードに貼った「ねずみ、ライオン、ゴリラ、カンガルー」の動作をイメージして、音のイメージへ置き換える活動。子供の発言例は次のとおり。

・音高について：低い。どすどす。ゴリラより高い。

ねずみより低い。カンガルーと同じ。

・速さについて：のそのそ。遅い。速い。

・動作について：大きい。小さい

・リズムについて：ジャンプ。跳ねている。ポンポン。

②10/13「A君のライオンとB君のライオンを見て」「ライオンはねているのせかいをそうぞうしよう」

二人のライオンを表した身体動作を見て、感じたことを発表し合う活動。子供の発言例は次のとおり。

・音が出るように歩いていた／音が出ないように歩いていた。(音楽が止まったから)かたまって、ぴたっと止まったんだよ。ゆっくり歩いていた。

③10/27「ちょこっとちがうよをはっけんしたよ」

友達が考えた踊りを見ながら意見交換する活動。子供の発言例は次のとおり。

・動作について：足を開いている／足を開いていない。回っているよ。首をふっている／首をふっていない。ターンをしている。

・リズムについて：大きい。叩き方が速くなる。

・強弱について：大きい／小さい。○拍目だけ大きい。

・速さについて：速くなる。遅い。眠たい感じ。

④10/28「たたくおとのたかさがちがうよ」「パーでおとのたかさはかわるかな」

ジャンベの叩き方で、強弱や音の高さが異なることに気付き感じ取る活動。子供の発言例は次のとおり。

・音色について：こんこん。とんとん。木のドアを叩く音。手を開くと音が広がるよ。グーでもできるよ。

・強弱について：音が小さくなる。音が大きくなる。上の方を叩くと強くなって、下の方を叩くと弱くな

るよ。真ん中だと大きくて端っこだと小さいよ。手の形を変える。

- ・音高について：手の力を強めたり弱めたりすると音の高さが変わるよ。指を使うと変わるよ。叩く強さを変えると変わるよ。真ん中を叩くと低くて端っこを叩くと高くなるね。

⑤ 10/30 「きのうのおんがくのじゅぎょうでおもったこと」

意見交換と感想交流。他者へアドバイスをしたり、他者の考え方を取り入れてみたりする学び合いの活動。子供の発言例は次のとおり。

- ・楽しかったこと：新しい踊りを自分で考えた。上に跳ぶのが楽しい。びよんびよんするのが楽しい。
- ・動作について：膝を曲げると、高く跳んでる感じがする。膝を曲げないと、いっぱいジャンプ、早く跳んでる感じがする。

⑥ 「ちょこつちがうよではっけんしたこと」

意見交換と感想交流。子供の発言例は次のとおり。

- ・強弱について：太鼓ちいさく、歩いている動き。太鼓おおきく、元気な感じ。
- ・リズムについて：太鼓おおきく、ひらひらしている感じ。太鼓ちいさく、着陸する蝶々。
- ・動作について：首をふる、おこっている感じ。首をふらない、歩いている感じ。

2. 実践者による分析結果のまとめ

天野教諭が記した「成果と課題」より抜粋する。

(1) 音楽科の資質・能力と非認知的能力の「自信」の高まりとの相互関係について(天野記)

音楽科の資質・能力の高まりを実感すること、つまり「できた」という達成感・成就感から、自分の能力を信じることへの「自信」に繋がっていくのではないかと考えた。そして「できた」というワークシートの言葉や授業における発言からだけでなく、高まりを実感した音楽科の資質・能力を自らで生かしていくことに価値があるのではないかと考えた。そこで、本実践で願う非認知的能力を「仲間と互いに認め合うことで、自分の表現に自信をもち、新たな表現を生み出すことのできる子供」と設定した。

(2) 本実践の成果(天野記)

抽出児童は、追求を見直す関わり合いを通して、最後をびったり終わらせるという拍への意識が生まれて、その意識をもとに自分のもつイメージに最後までこだわりながら自分の踊りを完成させることができた。さらに、音楽遊び「ねているらいおん」を授業以外の場でもやってみようとする意識や、音楽遊び「ねているらいおん」をベースに新たな遊びを友達と生み出す姿が見られたことが、本実践の成果だと考えられる。

(3) 研究協議会を受けて(天野記)

「インプットとアウトプット(筆者注：聴き取り感

じることと、表現すること)」。音楽科は、音楽を通して関わってこそそのもの。音や音楽を見合ったり聴き合ったりする中で、それを実際にやってみることが大切である。同じフォルテでも人によって感じ方が違う。それを実際にやってみることで、その感じ方の違いに気付くことができ、それを繰り返していくことで音楽科としての見方・考え方を拓げていくことに繋がるのではないかと感じた。

本実践では身体表現とジャンベを取り入れた。それにより、様々な要素が含まれ過ぎたために、子供が今何をしているのか、何を学んでいくのか不明確になることが多くあった。拍への意識が無ければ、その先にあるリズムや強弱などの要素は全て曖昧なものになってしまう。小学校1年生で拍を意識させるということは、これからも続く音楽教育の土台となっていく、そのことから、目の前の子供をきちんと捉えながら、子供の発達段階も踏まえ、要素を絞って単元を構成していくことが大切であると痛感した。

IV. 要素に関する気付きと、「主体的に学習に取り組む態度」に基づく筆者の分析

実践者は音楽に合う身体動作を追求する活動として行ったが、筆者はリズム創作による音楽づくりを追求する活動(リズムづくりと略記)と捉えて分析を行った。さらに分析の視点も主体的に学習に取り組む態度の評価観点と音楽づくりの評価観点から試みている。なお、主体的に学習に取り組む態度の評価観点は5章、音楽づくりの評価観点は6章で整理している。

1. 発言と記述の変化

要素に関わる発言やふり返りカードの記述について、単元内の変化を分析する。なお用語の捉え方を誤解している場合は、前後の文脈により判断した。また主体的に学習に取り組む態度の学習評価については、「他者の意見に耳を傾ける、自分の意見を捉え直してみる」等の学習の調整能力に関する観点と、「粘り強く取り組む」に類する観点を取り上げて分析している。

(1) 10/30のふり返りカード[子供31名]

①要素：リズムに関する記述が1件のみあった。

[所感] イメージを膨らませる活動が中心であったため要素に関わる記述は少なかったが、踊りを伴うリズムづくりに入る前に、まず表現したい様相や場面を考えさせて、リズムづくりで表したいイメージを意識させてから活動に入ったことが、後に単なる音並べやリズム打ちの活動へ陥ることを防いだと考えられる。

②主体的に学習に取り組む態度に関わる記述

多くの児童が自身の好みに基づく記述をする中、2名が「何の動物でも賛成してやりたい」「まずは自分の嫌いなものから好きなものへやっていく」という、他

者の意見に耳を傾ける旨の記述をしていた。

(2) 11/4の授業における発言〔子供の発言数55〕

①要素：音色に関する発言のみ16件あった。

〔所感〕教師が「音」に注目させたことから、様々な音色に気付いた発言があった。これにより、単純にジャンベを叩きながらリズムを並べていく活動ではなく、出したい音色、表したい音の表情へ子供の意識を向けることができている点に注目しておきたい。

②主体的に学習に取り組む態度に関わる発言

好き嫌いから離れた発言が2名、他者の意見に寄り添う発言が2名あり、その中には自身の考えを問い直してみようというアドバイスがあった。

(3) 11/13のふり返りカードの記述〔子供31名〕

①要素：リズムが18件、フレーズが6件に増えた。

〔所感〕以前に実践者が「音」に注目する働きかけを行ったため、リズムに注目したりフレーズのまとまりに気付いたりする発言が出るようになった。後者のフレーズのまとまりに関する気付ときは、学習指導要領が低学年で求める「音を音楽にしていくこと」の意識化を促すものであることを重視したい。

②主体的に学習に取り組む態度に関わる記述

他者の演技を見て「ジャンベの叩く場所や手の形が違う」ことに気付き、それを取り入れてみようとする記述があった。またフレーズの終わり方が自分とは異なることに注目し、その理由を類推していた。

(4) 11/19の授業における発言〔子供の発言数34〕

①要素：リズム4件、フレーズ3件、拍のまとまり13件、速度3件と要素の気付きが多様化した。

〔所感〕表したい音色に注目してリズムづくりを創意工夫するうちに、リズムだけでなく表したいイメージに合った様々な要素にも目が向くようになっていく。特にフレーズのまとまり（曲のまとまりや繰り返し、類似するリズム・パターン）と、拍のまとまり（リズムが4拍に納まる）については、将来、学習指導要領の中学年で求められる「まとまりを意識した音楽をつくる」へ繋がる発想であることを重視する。

②主体的に学習に取り組む態度に関わる発言

抽出児童が考えた踊りとジャンベを叩くリズム・パターンを取り上げて意見交換が行われた。アドバイスや指摘が多く出される中、「思い込んでいるから」という発言があり、自分の思い込みからいったん離れて、改めて皆で見直してみたり試してみたりするなど他者の意見を受け入れてみようというアドバイスがあったことに注目したい。また「音楽に合わせないと難しい」という発言もあり、音楽を聴きながら試行錯誤することを望んでいた点も注目に値する。

(5) 12/4の授業における発言〔子供の発言数69〕

①要素：リズム5件、拍のまとまり14件、速度2件、強弱6件と気付きが多様化し発言者も増えた。

〔所感〕気づきが多様化して、様々な要素に耳を傾け

ることができるようになってきた。特に授業の後半では、拍のまとまり（リズムが4拍に納まる）を取り上げた発言が多く出て、曲の終わりとリズム・パターン（踊り）の終わりのタイミングを一致させる方がよいのか、それとも一致させない方がよいのか、活発に話し合いが進んだ。また実践者からの「4拍に納まるようにするのが大切なのか、それとも表したいイメージを大切にするのか？」という問いかけをきっかけとして双方から意見が出たのだが、その中に「どちらも大事、どちらも大切にしたい」という多様な考え方を尊重しようとする発言があったことに注目したい。

②主体的に学習に取り組む態度に関わる発言

自身の意見を述べるだけでなく他者の意見を代弁したり、他者の意見に理解を示したりする発言も出るようになった。そしてこの段階でようやく「諦めずにやって～最後にもう一度やってみたらできた」という粘り強く活動に取り組む旨の発言が1名あった。

(6) 12/15の授業における発言〔子供の発言数53〕

①要素：リズム2件、拍のまとまり5件、強弱1件に減じ、議論もほぼ集約化された。

〔所感〕活動全体をふりかえって感想交流と意見交換を行ったので、ここでは新しい気付きは多く出なかった。しかし最後まで拍のまとまり（リズムが4拍に納まる）のことを気にかけて、粘り強く考え続けたことにも注目しておきたい

②主体的に学習に取り組む態度に関わる発言

活動のふり返りであったことから、自身の意見を述べるよりも、他者からアドバイスをもらって巧くいったこと、自分のやりたいことを上手に説明してくれたこと、アイデアをもらって解決した等の他者の意見を受け入れたり、理解しようしたりした発言が多く出た。またテーマが同じでも違う意見だったから凄いなと思った、いっぱい発言した、考え直した等の多様な考え方を受け入れる発言があったことも興味深い。

チームで頑張った、チームでいろいろ考えた等の発言があり、粘り強く活動に取り組んでいたことを窺うことができる。中には「悩んだこともあったけど、悩んだことも踊りをつくる楽しさになった」という感想があったことも記しておきたい。

2. 筆者の分析のまとめ

(1) 要素に関わる子供の姿容

コロナ影響下で1年生を対象にして行われたことから、通常は1学期で扱う歌唱や体を動かす活動を十分に経験することができず、本実践において同時進行で取り組ませる必要があった。そのため次のようなきめ細かい配慮がなされていた。

①多くの場合、歌唱や音楽あそび等の身体動作、鑑賞等を行ってから音楽づくりに入るのだが、今回はそれら多領域の活動を網羅的に含んだ活動が企画され

ていた。例えば、毎時間の最初に音楽に合わせて体を動かして音楽に浸る時間をとったり、音楽を聴いてアフリカで動物がたくさんいる様子等のイメージを膨らませる時間をとったりした後に、意見交換や感想交流の時間も設けていた。これにより子供は自身の考えや意見もち、音楽のイメージを抱こうとする素養を自分自身で育むことができていた。

②要素について、個別に取り上げて教師の言葉で指導するのではなく、子供の意見に寄り添いながらその都度音を出して確認したり、子供自身の言葉で説明させたりしていた。これが体感を通じた生きた知識として学び取ることに繋がり、その活動を基にした教え合いや学び合いの素養にも繋がっていた。

(2) 主体的に学習に取り組む態度に関わる子供の変容

①多領域を網羅した活動へ自身のペースで取り組み、グループや全体の意見交換の中で教え合いや学び合いを経験できたため、自分の中から「最後までがんばる」という意識が芽生えていた。これは「粘り強く取り組もうとする態度」へ繋がる。

②音楽に浸る時間や音楽を聴いてイメージを膨らませる時間を確保したこと、その後に意見交換や感想交流の時間を設けたことにより、子供は自身の意見と他者の意見を比べたり、他者の意見を取り入れたりする素養を育むことができていた。これは「自らの学習を調整する能力」へ繋がる。

V. 学習指導要領で示された学習評価の再確認

1. 「主体的に学習に取り組む態度」の再確認

この評価については、前指導要領の「学びに向かう意欲・関心・態度」と混同されている場合が少なくない。この誤解を解くために、筆者の先行研究から抜粋引用する形で整理しておきたい。⁽⁵⁾

(1) 主体的に学習に取り組む態度の評価の確認

学習指導要領で示された目標の中の「学びに向かう力、人間性等」については、評価の場合は「主体的に学習に取り組む態度」として評価することとされており、その基本的な骨格は「授業において取り上げる〔共通事項〕の要素について、主体的・協働的に歌唱または器楽、音楽づくりの活動に取り組もうとしている。」としている。ちなみに、ここで言う活動とは、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の全ての活動のことを指している。

例えば、授業で取りあげる要素を「音色」にした場合の評価規準は「音色に関心をもち、主体的・協働的に音楽づくりの活動へ粘り強く取り組もうとしている。」となり、取り上げる要素を「速度」にした場合には、「速度に関心をもち、他者の意見を取り入れながら、音楽づくりの活動に主体的・協働的に取り組もうとしている。」等となる。

その際に大切なポイントは次のとおりである。

①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組みを行おうとしているか？

②自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぼうとしているか？

③「音や音楽に親しむことができる」は評価規準として設定しない。

④「楽しみながら」は評価規準として設定しない。

⑤評価は毎時間行うものではなく、単元や題材のまとめ、活動の区切りごと、時間のまとめなど、活動の成果を把握できる段階で行う。

(2) 主体的に学習に取り組む態度の評価方法の確認

評価の仕方は次のように例示されている。

①演奏（またはその録音）、作品（楽譜だけではなく録音や録画、絵や図も含む）、ノートやメモの書き込み、ワークシートの記述、プレゼン、意見発表、グループ活動の中での発言、自己評価や相互評価、ポートフォリオ等、多様な評価方法を組み合わせて行う。

②「粘り強く取り組もうとしているか」と「他者の意見や感じ方、捉え方等を取り入れて自らの学習を調整しようとしているか（自らの意見や考えに過度に固執していないか）」の2つの観点を組み合わせて行う。

2. 音楽づくりの評価方法の再確認

前節と同じく筆者の先行研究から抜粋引用して、評価方法について再確認しておきたい。⁽⁶⁾

(1) [共通事項]における「思考力、判断力、表現力」の評価方法の基本

表現（歌唱・器楽・音楽づくり）と鑑賞の両方の活動において扱う〔共通事項〕の「ア思考力、判断力、表現力」の評価の観点の場合は、「思考・判断・表現」として扱い、その文末は「どのように表すかについて、思いをもっている（中高学年：思いや意図をもっている）」等としている。

(2) 音楽づくりにおける「思考力、判断力、表現力」の評価方法の基本

音楽づくりの「ア思考力、判断力、表現力」の評価の観点の場合は、「思考・判断・表現」として扱い、その文末を「どのようにして音を音楽にしていくなかについて思いをもっている：低学年」、「どのようにして音を音楽へと構成することを通して、どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもっている：中学年」または「どのようにして音を音楽へと構成することを通して、どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもっている：高学年」等としている。

(3) 音楽づくりにおける「知識」の評価方法の基本
音楽づくりの「イ知識」の評価の観点の場合は、「声や身の回りの様々な音の特徴に気付いている：低学年」または「いろいろな音の響きやそれらの組み合わせの特徴に気付いている：中学年、（高学年は文末が～理解している）」、そして「音やフレーズのつなげ方の特徴に気付いている：低学年」または「音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴に気付いている：中高学年、（高学年は文末が～理解している）」等としている。

(4) 音楽づくりにおける「技能」の評価方法の基本
音楽づくりの「ウ知識」の評価の観点の場合は、「発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な、設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能を身に付け、音楽づくりで表している」または「発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な、音楽の仕組みを用いて、簡単な音楽をつくる技能を身に付け、音楽づくりで表している」等としている。

おわりに

本報告の研究対象として研究実践を提供していただいた愛知教育大学附属岡崎小学校と音楽科の天野朝代教諭へ心より謝意を表したい。なお本実践にあたっては、新型コロナウイルスへの対応のため入学直後の1学期には休校になった期間があり、学校が再開された後も学校教育活動が制限され、音楽科の授業には歌唱が禁止されるなど大きな制約の掛かる中で取り組まれたものであることを付しておく。筆者も研究打ち合わせで子供たちが元気に活動する姿を見た時には安堵するとともに「子供の学びを止めてはいけない」という思いを強くした。2章で紹介した白井学前教科調査官による「できない活動はあっても指導できない事項はない」という言葉を大切にしたい。

注及び引用資料

- (1) カワイサウンド技術音楽振興財団より研究助成を受けて行った研究は、「愛知教育大学リポジトリ新山王」で検索の上、参照されたい。
- (2) 拙著「思考を伴った試行錯誤に基づく小学校音楽科『音楽づくり』の課題」、日本音楽表現学会第19回大会発表要旨、新島学園短期大学、2021
- (3) 白井学氏が、平成30年度愛知県音楽教育研究会で行った「講演資料」及び筆者の聴講メモより。
- (4) 天野朝代「愛知教育大学附属岡崎小学校令和2年度2学期実践のまとめ」、第71回生活教育研究協議会資料「豊かに生きる－教科・領域特有の資質・能力と非認知的能力を高める教師支援を探る－」、2021
- (5) 拙著「研究ノート：音楽科授業における言語活動

と主体的に学習に取り組む態度の評価の在り方について－文部科学省の資料の整理に基づいて－」、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第6号、pp.161-168、2021

(6) 前掲書 (5)

参考資料

- * 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』、東洋館出版社、2018
- * 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』、教育芸術社、2018
- * 志民一成「令和元年度小・中学校各教科等担当指導主事連絡協議会報告書、音楽＜小学校＞」、2019
- * 白井学「令和元年度小・中学校各教科等担当指導主事連絡協議会報告書、「音楽＜中学校＞」、2019
- * 志民一成『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料（小学校・音楽）』、国立教育政策研究所教育課程研究センター、東洋館出版社、2020
- * 白井学『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料（中学校・音楽）』、国立教育政策研究所教育課程研究センター、東洋館出版社、2020

[天野教諭による研究実践構想図]

7 単元カリキュラム (17 / 17 時間完了)

○ひとり調べの時数 ◎かかわり合いの時数 問い ◆ほりおこし ◇事前学習

【単元前の子どもの姿】

- ・気の合う友だちとのなかで、柔軟な想像力や発想力生かして表現するおもしろさを感じる子ども。
- ・音楽に合わせてみんなで踊る楽しさを感じながら、拍やリズムの大切さに気づきつつある子ども。

[非認知的能力に
かかわる教師支援]

[教科・領域特有の資質・
能力にかかわる教師支援]

- ◆ みんなで演奏するおもしろさと、それぞれ異なる演奏をするおもしろさをほりおこした。
- ◆ 音楽に合わせて身体表現をするなかで動物の様子を想像するおもしろさをほりおこした。
- ★ 1 希昊が抵抗なく音楽遊び「ねているらいおん」に取り組めるように、希昊が日常で遊んでいるオリジナルの遊び歌の要素を取り入れた。
- ★ 2 追求意欲を高めるために「ねているらいおん」の世界にいる動物の動きを具体的に踊りとして表現している仲間のよさを取り上げた。
- ★ 3 仲間の追求のよさや困り事に目を向け、自分の追求に生かしたりアドバイスしたりできるように、朱記や対話でゆさぶりをかけた。
- ★ 4 仲間の追求のよさを生かすなど、仲間とのかかわりのなかで生まれた自分のよさを実感させるために自分がなぜ成長したのかを問い返した。

「ねているらいおん」で遊んでみよう

・ウシガエルが楽しい(灯) ・自分で考えると楽しいね(依央理) ④
・いっぱい動物を増やしたいな(亜沙美) ※ 1

・先生を食べるワニ ・「ねているらいおん」 ・アフリカの動物をやりたい(仁美) の世界にゾウ(乙輝) やりたい(零) ★ 1

問いを生むかかわり合い

言葉から 音から

・ジャングルのなかだね(水佑) ・すず虫の音(凌駕) ※ 2
・草がある(真) ・トラ(恭右) ・人間が草を踏む音(零)
・歌詞から想像すると「ねているらいおん」に合うね(璃子)
・「ねているらいおん」を想像しながら動物を増やそう(巧翔)

「ねているらいおん」の世界にいる動物を自分の踊りで表現したいな

回るよ 歩くよ 跳ねるよ ④

・楽しさを表すよ(心寧) ・狙うように(誠宏) ・びよんびよん(怜名)
・お祭りだよ(希昊) ・守るよ(凌駕) ・空を飛ぶよ(和奏)
・みんなにわかってもらえる踊りになっているかな(終仁) ★ 2
・なぜ最後にたたいたのかな(泰正) ・終わる感じにならないな(希昊)

追求を見直すかかわり合い

＜希昊さんの踊りをじっくり見て思ったこと＞

音楽に合わせて イメージに合わせて ※ 3

・リズムがわかりやすいよ(大翔) ・お祭りっぽくするためだね(零)
・どうして⑦の踊りがはみ出しているのかな(巧翔)
・4分の4拍子だから、一つの箱で4つのことができるよ(璃子)

「1・2・3・4」の「4」で終わらないといけないね

ぴったり合わせて イメージに合わせて ③

・最後にぴたっと止まるよ(仁美) ・鼻から水を出けポーズ(乙輝) ★ 3
・「3」でジャンプするよ(誠宏) ・「4」を強くたたくよ(大翔)

核心に迫るかかわり合い

＜自分で踊りを考えていくなかで大切だと思ったこと＞

ぴったり合わせて イメージに合わせて ※ 4

・リズムに合わせること(泰正) ・何の動物か分かるように(仁美)
・「4」でぴったり終わらせる(依央理) ・かっこいいイノシシ(大翔)
・「1・2・3・4」とイメージを合わせて踊りを考えること(和奏)

どっちも音楽遊び「ねているらいおん」に必要なね

自分が考えた踊りを使ってみんなで遊ぼう ②

・組み合わせたら楽しかった(亜沙美) ・みんなの踊りが見れたよ(乙輝)

学びを振り返るかかわり合い

自分の踊り 新しいチームで 友だちの踊り ★ 4

・悩んだことも考える楽しさ(璃子) ・みんなで練習したらできた(莉理那) ・希昊さんのおかげで踊りができた(瑛之)
・新しく考えた踊りを「ねているらいおん」に合わせてやりたい(希昊)

- ◆ 常時活動のなかで、音楽を形づくっている要素に応じた身体表現をするおもしろさをほりおこした。
- ◆ ジャンプを使ったリズム遊びから、様々なリズムを打つおもしろさをほりおこした。
- ※ 1 繰り返し遊んでいくなかで、同じ踊りでも、人によって違うという気づきから、感想交流を適宜行い、違うおもしろさを意識化した。
- ※ 2 「ねているらいおん」の世界にいる動物を自分の踊りで表現したいという問題意識にまで高めるために、音楽『ライオンは寝ている』をじっくり聴く時間を設けた。
- ※ 3 音楽の終わりと踊りの終わりを合わせることで拍の意識をもたせるために終わり方に困っている希昊の踊りを取り上げた。
- ※ 4 音楽的な成長を感じることができるよう追求前の踊りと追求後の踊りを動画で比較した。

【単元後の子どもの姿】

- ・仲間と互いに認め合うことで、自分の表現に自信をもち、新たな表現を生み出すことができる子ども。
- ・自分のもつイメージを表現していくなかで、拍を意識しながら身体表現やリズム打ちができる子ども。

(2021年9月16日受理)